大山寺僧坊跡発掘調査成果Ⅶ

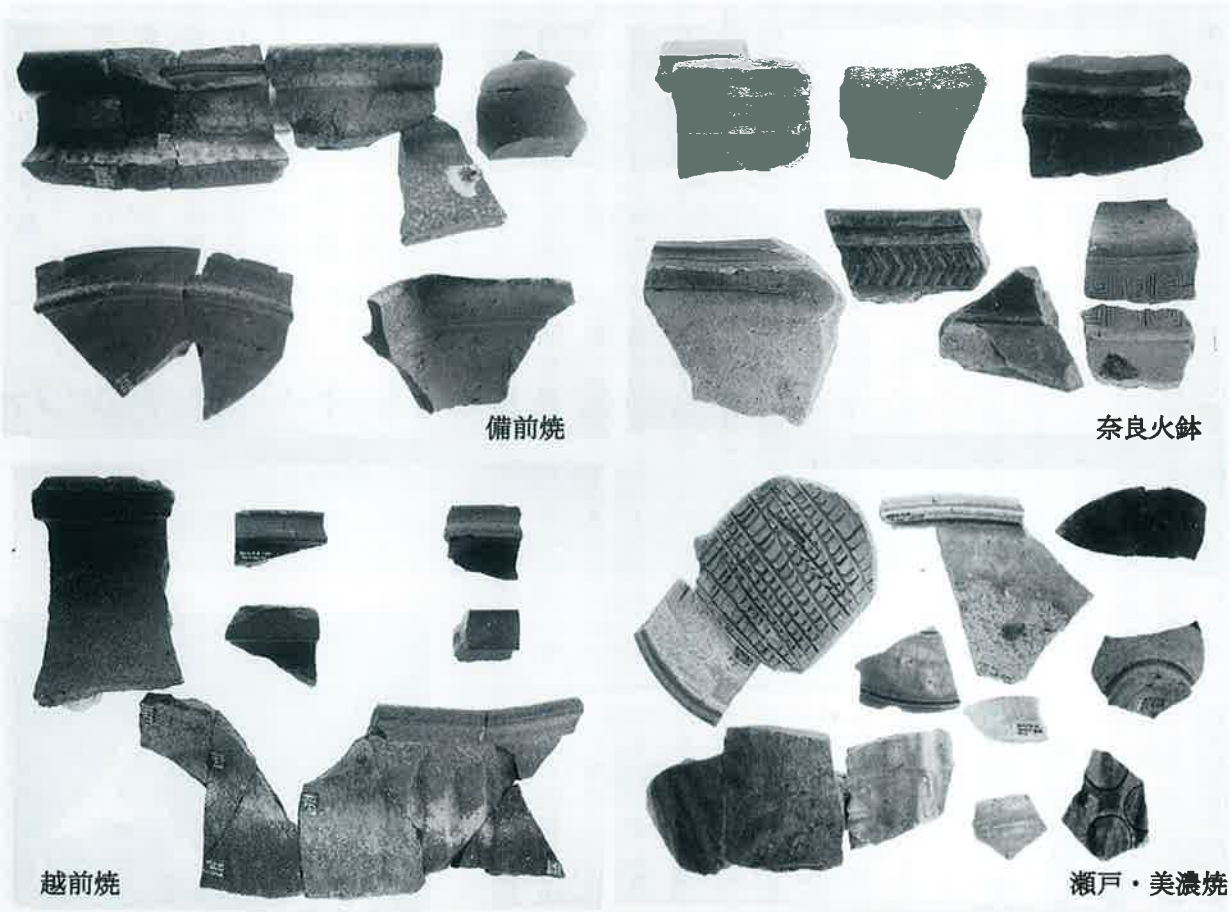
出土遺物について

大山寺僧坊跡J－14の発掘調査では、14～15世紀の土器や陶磁器が多量に出土しました。このことから、僧坊跡J－14は、その頃に盛期を迎えた僧坊の跡であり、活発な交易を行っていたということが分かりました。今回は、その成果についてご紹介します。

遠隔地から運ばれてきた陶磁器

大きな成果として、様々な地域から陶磁器が運ばれてきたことが分かりました。特に、中国や朝鮮との貿易によってもたらされた青磁、白磁、青花（染付け）などが多量に出土しました。

室町時代以降になると、普通の集落遺跡でも一定量出土しますが、それと比べても、質、量ともに豊富であるうえに、特筆すべきものとして酒会壺（酒会に使われる青磁の壷）の蓋、花瓶、香炉、高麗青磁の梅瓶など、その当時の超高級品が多く含まれていました。これらは、戦国大名の城館跡や大寺院跡などでしか出土しないようなものであり、これらから当時の大山寺の富の大きさや権力の強さを窺がい知ることができます。



国産陶磁器

一方、国産のものでは越前焼（福井県）、備前焼（岡山県）、瀬戸・美濃焼（愛知県）、奈良火鉢（奈良県）などが出土しており、全国各地の産物の物流拠点であったことが分かりました。

また、中国の貨銭も40枚出土しました。当時、国内で通貨は鋳造されていないため、中国で流通していた明銭などがそのまま使用されていました。これにより大山のような山の中でも貨幣経済が営まれていたことも確認できました。

大山寺の経済活動

これらの遺物によって、当時の大山寺が一般の集落や城館からかけ離れた山の中に所在していたにも関わらず、貨幣が流通し、遠隔地から商品が集まる物流拠点であったことが分かりました。このような活発な経済活動からは、大山寺は「山岳寺院」のもつ山奥で俗世から離れて禁欲的に修行に励む聖地といったイメージよりは、商業都市的イメージの方が近いものであったといえるのではないでしょうか。

さらに、多種多様な貿易陶磁器が多量に出土した背景には、当時、これらを「唐物」と呼び珍重していたことに関係すると考えられます。これは今の日本人の欧米ブランド志向とよく似ているように思います。